

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The study framework of viewpoint : focus on locomotive verbs sentence

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古賀, 悠太郎, Koga, Yutaro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1523

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「視点」研究の枠組みを求めて —移動動詞文を例に—

古賀悠太郎

1. はじめに

本稿の出発点は、「言語学の世界において『視点』をキーワードにした研究がますます活発になっている一方で、研究者によって『視点』という術語の使い方が少しずつ異なるため同じ基準で議論を進めることが実は困難である」という現状に問題意識を持ったことである。たとえば、基準点という意味での視点や主語項という意味での視点、さらには共感度という意味での視点など、実に様々な視点が存在する¹。本稿の考察対象である移動動詞「行く/来る」の使い分けも「視点」概念を用いて説明されることが非常に多いが、移動動詞に関する研究に限っても視点という術語の用いられ方はやはり一様ではない。

このような問題意識から、「言語学の世界において『視点』について議論する際に研究者同士で共有できる何か共通の枠組みのようなものを準備できないだろうか」と考えるようになった。これが本稿執筆の動機である。したがって、本稿では移動動詞文を主な考察対象としているが、これは視点に関する議論の枠組みの一例にすぎない。いくつかの個別具体的な移動の事象について「行く/来る」の使い分けがどのようにになっているか観察し記述していくことにはなるが、本稿はそのことを目的としているのではない。目的はあくまで視点について議論する際の共通の枠組みを準備することである。

2. 「視点」の定義

2.1 従来の研究における「視点」

これまでの研究で「行く/来る」の使い分けの説明に用いられてきたのは主に基準点視点と共感度視点の二つである。

(01) 今からのび太君がここに {*行きます/来ます}。

(02)a (話し手は昨日「パーティー」の会場に居た。)

昨日のパーティーにはスネ夫君も {*行きました/来ました} よ。

b (明日「パーティー」の会場で会うつもりで。)

明日のパーティーにはぜひ {*行って/来て} くださいね。

1 「視点」諸概念について、詳しくは渡辺（1999）を参照のこと。

上述のような移動の事態について、基準点視点をを用いた説明を試みるならば、話し手の現在位置、或いは過去・未来における話し手の位置に視点が置かれ、そこを基準に移動動詞が選択されるため、上述の例すべてにおいて「来る」が選ばれるという説明になる。この場合、話し手の現在位置を基準点としていない例(02)a,bは「視点の移行」が起こっていると捉えられる。

一方、共感度視点をを用いた説明を試みるなら次のようになる。

共感度という概念を最初に提唱した久野(1978)は、移動動詞「行く/来る」が内包する視点制約(pp.253-254)と発話当事者の視点ハイアラキー(p.146)を次のように規定している。

- $$\left\{ \begin{array}{l} \text{「来る」 : } E(\text{到着点側の人}) > E(\text{動きの主体, 出発点側の人}) \\ \text{「行く」 : } E(\text{動きの主体, 出発点側の人}) \geq E(\text{到着点側の人}) \\ \text{発話当事者の視点ハイアラキー : } 1=E(\text{一人称}) > E(\text{二・三人称}) \end{array} \right.$$

例(01)では移動先は話し手の現在位置、そして移動行為者は「のび太君」(第三者)である。人称で言えば移動先は一人称であるのに対して移動行為者は三人称である。当然ながら話し手は移動先に視点を寄せる(共感する)ことを義務づけられる。また、例(02)a,bは、移動先は話し手の現在位置ではないものの、過去・未来における話し手位置であるという意味で、人称で言えば限りなく一人称に近い。そのため話し手はやはり移動行為者(「スネ夫君」・聞き手)よりも移動先に視点を寄せなければならない。こうして、上述の例すべてにおいて「来る」が選ばれることになる。

2.2 本稿における「視点」

ここで、先に取り上げた基準点視点と共感度視点は互いに対立し合う概念ではないことを指摘しておきたい。例(02)a,bを見ても、過去・未来における話し手位置は、話し手が「基準点」とする場所であり、また「共感する」場所でもある。(この例に関する限り)実は同じことを違う言葉を使って説明しているにすぎない。そもそも、移動動詞文のみを研究対象とするならば、「来る」が用いられる状況と「行く」が用いられる状況について個別具体的に記述していけばよいのであって、視点という概念を用いる必要はない。

この一点を確認した上で、それでも本稿では、移動動詞「行く/来る」の使い分けについて共感度視点を基軸にした説明を試みる(したがって、以下、本稿における「視点」という術語は「共感度視点」を指す)。その理由は、本稿における視点に関する議論を他の文法項目にも広げていくことを念頭に置いたときに、共感度視点を基軸にした枠組みの方が圧倒的に有利であると思われるからである。

ただし、久野(1978)による「共感度」概念も、このままでは十分に説得力

を持つとは言い難い。そこで本稿では、久野の規定に二つの修正を加えることで、視点について考察する新たな枠組みを形成したい。

まず、久野は移動の事態に関係する存在として「到着点側の人」、「動きの主体」、「出発点側の人」の三者を設定している。たしかにそれ自体は問題ないのだが、筆者は、視点の基本はある事態に関係する二者のうち話し手がどちらに視点を寄せるかを規定することであると考えている。そこで、移動の事態に関係する存在として「移動先」と「移動行為者」の二者を設定した上で、「行く/来る」と視点について次のように規定したい。

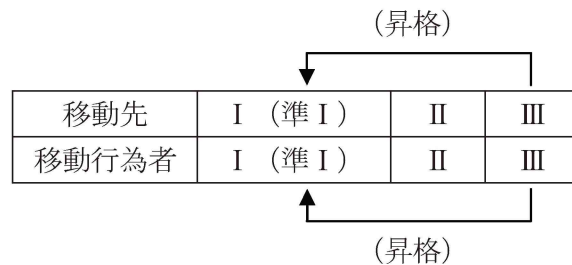
<規定①>

「来る」：移動先と移動行為者のうち、話し手が移動先に視点を寄せる場合に用いられる。

「行く」：話し手が移動行為者に視点を寄せる場合、或いはどちらかに視点を寄せる動機が存在しない場合に用いられる。

次に、久野は発話当事者の視点ハイアラーキーを「1=E（一人称）>E（二・三人称）」と規定しているが、この規定における一人称と二・三人称の対立が具体的に何を意味するのかは実は明確ではない。久野の意図はおそらく「1=E（近い存在）>E（遠い存在）」であると考えられるが、それでも移動先と移動行為者のどちらが「近い存在」として遇されるかを決定する要素がいま一つ明らかではない。

そこで本研究では、まず、あらゆる移動の事態を人称によって切り分けるために、移動先と移動行為者のそれぞれに人称を設定する。つまり、移動行為者について話し手・聞き手・第三者を設定するのと同じように、移動先にも話し手領域・聞き手領域・その他領域を設定する。ただし、ここで注意すべきは「話し手に準ずる存在」（準一人称）である。話し手に準ずる存在（以下、「準話し手」と呼ぶ）とは、第三者出身でありながら、限りなく話し手と同一視され、そのため絶対的に聞き手や純粋な第三者より上位の人称が与えられる存在である。ある存在が第三者のままであるか、それとも準話し手に「昇格」しているかの判断は、視点の議論にとって非常に重要である。したがって、準話し手の範囲を明確に定める必要があるが、これについては第3節で詳しく考察する。



このように移動先と移動行為者それぞれに人称を設定した上で、本稿では次の規定②を提案する。

<規定②>

話し手は必ず、移動先と移動行為者のうち自らにとって「近い存在」に視点を寄せなければならない。ただし、「近い存在」の決定のされ方には以下の二種類がある。

- A) 「人称型視点」：話し手が視点を寄せる対象（近い存在）が、「E：話し手（>準話し手）>聞き手>第三者」という人称による優先順位に制限される視点。
- B) 「文脈型視点」：話し手が視点を寄せる対象が人称による優先順位以外の要素によって決定される視点。

したがって、あらゆる移動の事態について、どちらの視点がどのように関与しているかを慎重に考察する必要がある。

以上が本研究における視点の枠組みである。これを踏まえて、以下、第3-5節ではあらゆる移動の事態を、①話し手が関係する移動、②聞き手が関係する移動、③第三者同士の移動の三つに分類した上で、ここで準備した視点の枠組みを用いた「行く/来る」の使い分けの説明を試みる。

3. 移動動詞文と視点(1)——話し手が関係する移動

話し手が関係する移動とは、話し手（及び準話し手）が移動先、或いは移動行為者として関係する移動のことである。つまり、「他者（聞き手・第三者）が話し手領域へ」の移動、及び「話し手が他者領域へ」の移動がこれに該当する。

話し手が話し手自身に視点を寄せるというのが「視点」概念の最も基本的な

原則であるから²、話し手が関係する移動の事態には人称型視点（E：話し手＞聞き手・第三者）が関与するはずである。したがって、ここで重点的に考察すべきは、「二つの視点」のうちどちらが関与するかではなく、移動先、また移動行為者としての話し手＋準話し手の範囲についてである。とくに第三者が準話し手に昇格する条件については詳細に考察しなければならない。

3.1 移動先としての話し手と準話し手

移動先としての話し手と準話し手を合わせて、本稿では話し手領域と呼ぶ。結論から言えば、話し手領域として認められる場所は次の三つである。

①話し手の現在位置

②話し手の恒常的な位置（この用語は張芑蕾(2009)による）

③過去・未来における話し手位置

このうち、①は移動先としての話し手そのもの（人称で言えば一人称）であるのに対し、②～③は準話し手（準一人称）である。

話し手領域への他者移動の場合、人称型視点（E：聞き手・第三者＜話し手領域³）により話し手は移動先に視点を寄せることを義務付けられるため、移動動詞は一律に「*行く/来る」となる。

以下、①～③が話し手領域として認められる条件について詳しく観察する。

3.1.1 話し手の現在位置

話し手にとって、時間軸における「現在」、及び空間における「ここ」ほど基本的な領域はない。その意味で、話し手の現在位置は移動先としての話し手そのものである。「その他領域」出身ではないため、話し手領域に昇格する条件について考察する必要はない。

(03)a 昨日ここに {*行きました/来ました} か。

b いつもここに {*行ってる/来てる} んですか。

c 明日もここに {*行きます/来ます} か。

(04)a 田中は昨日ここに {*行った/来た} ようですね。

b 田中はいつもここに {*行く/来る} んですか。

c 田中は明日もここに {*行く/来る} だろうか。

(05) ちょっと部屋まで来て {/*行って} くない。2015号室、二十階よ。

森村誠一『新幹線殺人事件』

2 「話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない」（久野（1978:146））。

3 以下、話し手が視点を寄せる対象について記述する場合、不等号の左辺に移動行為者、右辺に移動先を示す。つまり、「<」は移動先に、「>」は移動行為者に視点が寄せられていることを示す。

- (06) 「男はいるよ。同じ福建省出身」「名前は?」「杜彦中よ」「この店にはしょっちゅう来る {/*行く} のかい?」 森詠『青龍, 哭く』

3.1.2 話し手の恒常的な位置

それに対して, ②話し手の恒常的な位置や, 次に考察する③過去・未来における話し手位置は移動先としての準話し手であり, もともとはその他領域であった場所が何らかの理由で話し手領域に昇格したものである。したがって, 昇格の条件を明確に規定しておく必要がある⁴。

話し手の恒常的な位置という用語は張凡蕾(2009)によるもので, 「一定の期間内に話し手が常にいると認識される場所」のことである (p.18)。ここでは, 話し手の恒常的な位置として「話し手が現在住んでいる場所」と「話し手の現在の所属先」の二つを想定した上で, 昇格の条件を考察する。

まず, 話し手が住んでいる場所とは, 話し手が住んでいる家・部屋など建物のほか, 「神戸」, 「兵庫」のように話し手が住んでいる地域も指すが, これらはほとんどの場合において昇格する。

- (07) 「結局, 要さんとはどういう関係なの」俺が訊くと, 兄貴は机の上にあった腕時計をしつつ, 「一緒に仕事してるだけだよ。恋愛関係は昔も今も一切ない」「…イヤ, そういう事じゃなくて, 仕事先でどういう関係なんだって訊いてんの。よく取材とか行くし, 家にも来る {/*行く} からさ」 朝丘戻。『わすれな人。』

- (08) そうして増えたたくさんの手ぬぐいが, お客様が来た {/*行った} ときに大活躍。 『レタスクラブ』2005年7月25日号

- (09) いい人間でも, 金のために, 変身することがありますからね。とにかく, あなたが京都に来て {/*行って} から知り合った人を, あげてみてください。 西村京太郎『京都感情案内』

ただし, 移動行為者も話し手の家・部屋と一緒に住んでいる, 或いは話し手と同じ地域に住んでいるという場合は注意が必要である。

- (10) (話し手は現在「家」に居ない。「コナン君」は話し手と同じ「家」に住んでいる居候の子供。)
コナン君, いつ家に {帰る/*行く/*来る/*帰って行く/帰って来る}

4 これは, 人称型視点と文脈型視点の境界線を定めるという意味でも非常に重要である。

(i) 明日田中君がうちの会社に来るそうです。

(ii) 来年王さんが(私の故郷の)神戸に留学に来るそうです。

これらの例の移動先である「うちの会社」, 「(私の故郷の)神戸」をあくまでその他領域であると見るならば, 移動先も移動行為者も人称で言えば三人称であるため, ここでの「来る」の使用は文脈型視点による(文脈型視点について詳しくは後述)。一方, 昇格が起こっていると見るならば, 「来る」の使用は人称型視点によることになる。

のかな。

- (11) (電話での会話。話し手も聞き手も「神戸」に住んでいるが、現在はどちらも神戸に居ない。)

いつ神戸に {帰る/*行く/*来る/?帰って行く/*帰って来る} 予定ですか。

移動先が話し手の家・部屋である場合、最も自然なのは「帰る」である。そして、「行く/来る」は共に不可であるが、動詞「帰る」を前接すると「帰って来る」のみ可能となる。

一方、移動先が話し手が住んでいる地域である場合、やはり「帰る」が最も自然で、「行く/来る」は共に成立しない。そして、もし話し手と聞き手が同じ位置、或いは神戸以外の同じ領域に居る（例：どちらも東京に居る）という場合、「帰って行く」は使用できるが、それ以外の場合は「帰って行く」も難しい。「帰って来る」はほとんど不可能である。

次に、話し手の所属先とは、話し手が通っている学校や職場、それにバイト先などを指すが、これもほとんどの場合昇格する。

- (12) この一番目を掛けられる生徒たちの大部分は、当然、姫路西からの落ち武者たちであって、そうになると、はじめから播磨を目指して入学して来た {/*行つた} 生徒たちの間には、自分たちは見捨てられた者という空気が広がり、一つの学校内に溝が出来て、殺伐とするのである。

車谷長吉『武蔵丸』

- (13) 少ない予算の中で苦心して集めているのに、中学生は一向に読みません。そこで図書館によく来る {/*行く} 生徒をつかまえて、「なんで読まないんだ、君たちのために買ったんだぞ」と言ったら、一言でやられました。「あの本？あぁ、あれは優等生の読む本」

竹内サトル『共生する子どもと図書館』

ただし、ただ一つ、移動行為者が同じ所属先に所属している場合、話し手の所属先は昇格を阻まれることになる。

- (14) (「学校」以外の場所での会話。話し手・聞き手・「田中」は全員「学校」の学生。)

a 明日学校に {行きます/*来ます} か。

b 明日田中は学校に {行く/*来る} かな。

c 今年の学園祭にはあの浜崎あゆみが {*行く/来る} らしいよ！

つまり、準話し手位置に昇格し得る話し手の恒常的な位置とは話し手が住んでいる場所と話し手の所属先（など）であるが、移動行為者が話し手と同じ地域に住んでいないことや、同じ所属先に所属していないことが昇格の条件にな

る⁵。

3.1.3 過去・未来における話し手位置

過去・未来における話し手位置が昇格するための条件として最もよく指摘されるのは、移動行為者（聞き手・第三者）が到着した（する）時に話し手が移動先に居た（居る）ということである（井島（1992:12）など）。

- (15) 教授が不当監禁されたという現場にいなかったことが、証明されたのだろうか。留置場には男はいなかった。どこかに移送されてしまっていた。警察官が来て {/*行つて}「釈放だ」と言ってくれたときは、どれだけ嬉しかったことか。
『小説現代』2005年12月号

- (16) 支給された食べ物で十分に胃袋を満足させられない捕虜たちは、タバコを欲しがった。食べ物とタバコとの交換が行われるようになった。収容所に来る {/*行く} 北朝鮮人との物々交換も活発だった。

カツキ・タニガワ『帰還』

- (17) 警備員さんはあたしの顔をしってるから、このまま二人で並んで入っていくと怪しまれちゃう。まずあたしが先に行くんで、穰治君は五分ぐらい遅れて入ってきて {/*いって}。

『週刊新潮』2005年2月24日号

この指摘自体は何ら問題ないのだが、多少の補足が必要でもある。次の例のように、上の条件を満たしていなくても昇格できる場合が存在するからである。

- (18) 米国に着くと、妹のパットと夫のリーが空港まで迎えに来て {/*行つて} くれていた。私たちはさっそくウェルドンという町の中心部にあるパットの家に向かった。

チャールズ・R・ジェンキンス『告白』（伊藤真 訳）

- (19) あなたの女友達のことを話してるのよ。いつ会わせてくれるの？ 次の寄港地にも来る {/*行く} んでしょ？

ルーシー・ゴートン『モンテカルロの宝石』（仙波有理 訳）

例(18)では話し手が「空港」に着いたのは明らかに「妹のパットと夫のリー」より後である。つまり、移動行為者の到着時に話し手は移動先に居なかったことになる。また、例(19)も「女友達」の到着時に話し手が移動先（次の寄港地）に居るという保証はない。

5 なお、例(11)及び(14)a,bにおいて、それぞれの移動先が「未来における話し手位置」（3.1.3節参照）である場合は「来る」、「帰って来る」が可能になる。ただしこれは、移動先が「話し手の恒常的な位置」とは別の昇格の条件を満たしているからである。ここでは話し手の恒常的な位置が昇格する条件について考察するため、移動先は未来における話し手位置ではないものとする。

結局、過去における話し手位置が昇格するためには、話し手と移動行為者が同じ時間に当該の移動先に居たという事実が条件になる。また、未来における話し手位置が昇格する条件は、話し手が当該の移動先において移動行為者を迎え入れる心づもりでいることである。いずれの場合も、移動行為者の到着時に話し手が移動先に居た（居る）か否か、すなわち話し手の方が移動行為者よりも先に移動先に到着した（する）か否かは、昇格にとってそれほど重要な条件とはならない。

3.2 移動行為者としての話し手と準話し手

移動行為者としての話し手とは、言うまでもなく話し手自身のことである。「話し手が他者領域へ」の移動の場合、人称型視点（E：話し手＞聞き手領域・その他領域）により話し手は移動行為者に視点を寄せなければならないため、移動動詞は常に「行く/*来る」となる。

- (20) シリーニは頭を振った。「タクシーであなたの家に行く {/*来る} わ。
それからいっしょに出かけましょう」

アン・マリー・ウィンストン『禁断のときめき』（松村和紀子 訳）

- (21) 品川駅まで行く {/*来る} のに、特急電車で行く {/*来る} には運賃はいくらかりますか？ 岩崎勝利『希望のレールで』

やはり問題は準話し手の定義である。準話し手と言うからには、たとえそれが第三者出身であっても、限りなく話し手と同一視されるはずである。したがって、常に聞き手や純粋な第三者より上位の人称が与えられ、それゆえに優先的に視点を寄せられることになる。

ここでは、移動行為者としての準話し手として、とりあえず話し手の家族・親族・友人など話し手と何らかの人間関係を持つ存在を想定してみる。

- (22) 私の母がそちらに {行ったら/*来たら}、うちに電話するように言ってくださいませんか。 張芃蕾(2011)

- (23) a うちの子がそちらに {行きます/?来ます} ので、ひとつよろしくお願いします。

- b そういうことならばうちの子をそちらに {行かせます/*来させます} よ。

- (24) うちの子がお宅に {行きません/来ません} でしたか。

例(22)について張は「移動主体は話し手の母親であるため、聞き手より、母親への共感度が高くなり『行く』が用いられる」(p.116)と説明している。しかし筆者の語感では、今まで話し手と「母」が一緒に居りそこから「母」だけが移動するという場合や、話し手と「母」は同じ家に住んでおりそこから「母」だけが移動するという場合でなければ、「来る」の使用も不可能ではないと思

われる。また、例(23)a,bで「行く」が自然なのは「うちの子」の移動が話し手の意向によるものであることが前面に出ているからである。実際、そのような意味が前面に出ない例(24)は「行く/来る」の両方が可能である。

つまり、ここでの「行く」の使用は移動行為者の昇格を示すものではなく、このことは移動動詞文においては話し手の家族・親族でさえも準一人称に昇格することはなく、あくまで三人称として扱われることを示している。したがって、移動行為者としての準一人称は存在しないことになる（先に2.2節で示した図の下側に描いた矢印と、表の下の方の「(準Ⅰ)」を削除してほしい）。

では、移動先としてのその他領域が話し手と何らかの関係があれば積極的に昇格するのに対して、移動行為者としての第三者が話し手の家族・親族であっても昇格できないのはなぜか。

一つには、移動動詞文というのは場所から場所への動きを表すものであるため、人（移動行為者）よりも場所（移動先）のほうがより重視されるという理由が考えられる。また、能動的な存在と受動的な存在とでは同一視のしやすさが異なるという理由も考えられる。移動行為者は能動的に移動する存在であるのに対して、移動先はその移動を受動的に受け入れる存在である。移動の事態に限らず、話し手は、受動的な存在についてはそれが自分と少しでも関係のある存在であれば、（気持ちの上で）当該の事態を共に受け入れる立場を取りやすい。つまり、受動的な存在は話し手と同一化しやすい。一方、能動的な存在は、たとえそれが自らの家族・親族であっても、話し手自身でない限り、話し手と同一化しにくいのである。

4. 移動動詞文と視点(2)——聞き手が関係する移動

聞き手が関係する移動とは、「第三者が聞き手領域へ」の移動、及び「聞き手が第三者領域へ」の移動である。ここでは、聞き手が関係する移動には人称型視点と文脈型視点のどちらが関与するかという点が主要な関心事となる。

話し手が関係する移動に人称型視点に関与するのは当然のことであり、また第三者同士の移動に文脈型視点に関与するのも当然である。それに対して、聞き手が関係する移動については慎重に検討する必要がある。久野（1978）が「1=E（一人称）>E（二・三人称）」と規定しているのを見ると、聞き手と第三者は話し手が視点を寄せる優先順位という点で平等であるようにも思える（文脈型視点の関与）。しかし一方で、話し手の視点が「E：聞き手>第三者」の優先順位に制限される可能性も否定できない（人称型視点の関与）。山口（2002:61）も「世界を人称という概念で切り分けるにあたって、分水嶺となるのは聞き手（二人称）を含めるか否か、という基準なのである」と述べている

ように、視点に関する議論においても聞き手の扱いというのは非常に重要な要素となる。

4.1「第三者が聞き手領域へ」の移動

聞き手が関係する移動に人称型視点が関与するならば、「第三者が聞き手領域へ」の移動は「*行く/来る」(E: 第三者<聞き手領域)となるはずである。しかし、実際はそのようにならない。

(25) (電話で) もうすぐ歩美ちゃんがそっちに {行く/来る} と思うから、ちょっとだけ待ってやってね。

とりあえず、聞き手・「歩美ちゃん」ともに話し手の友人であり、話し手がどちらかと特別に親しいということはないと仮定する。

「来る」が選ばれるとすれば、それは聞き手領域と第三者との比較で人称が上位である聞き手領域の方が視点を寄せやすいからであろう。一方、「行く」が選ばれるとすれば、移動先と移動行為者との比較で目立つ存在である移動行為者の方が視点を寄せやすいからであると思われる。移動行為者の方が目立つというのは、先にも述べたとおり、移動行為者は能動的な存在で、移動先は受動的な存在だからである。つまり、ここで「行く/来る」の両方が使用可能なのは、人称が上位の方に視点を寄せる原則と、行為者に視点を寄せる原則が互いに同じレベルでせめぎ合いを起こしているからである。

いまここで重要なのは、聞き手(人称が上位の方)に視点を寄せることを強制されるわけではないということであり、このことから文脈型視点の関与が認められる。ではこの場合どのような要素が「行く/来る」の使い分けを決定するのだろうか。

(26) (聞き手は発話時に自分の家にいるが、話し手は、発話時・イベント時ともに聞き手の家にいない。)

ご両親、明日君のところに {*行く/来る} の？

(27) (発話時には A も B も花火大会会場にいない。)

A: この間、隅田川の花火大会を見に行っただすよ。

B: 見物に {*行っただ来ていた} 人は多かったですか。

例(26)-(27)ともに張芄蕾(2011)

(28) (国際電話で。話し手は東京、聞き手はアメリカ・ニューオーリンズに住んでいる。)

ハリケーンがそっちに {*行っただ来た} みたいだけど、大丈夫？

(29) (電話で。話し手は沖縄、聞き手は神戸に住んでいる。)

a 台風がそっち(神戸)に {行っただ来た} みたいだけど、大丈夫？

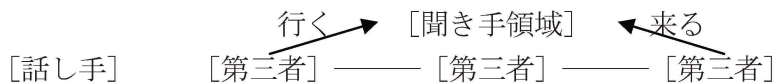
b 今回の台風5号、こっち(沖縄)には来なかったけど、そっちに

{行った/*来た} みたいだね。大丈夫？

(30) (到着点＝発話時とイベント時の聞き手)

私の母がそちらに {行ったら/*来たら}, うちに電話するように言っ
てくれませんか? (=例(22))

結局のところ, ここで「行く/来る」の使い分けを決定するのは相対的な共
感度, つまり, 話し手にとって移動先と移動行為者のどちらが相対的に「近い」
と感じるかによる。ただし, 聞き手は聞き手 (人称で言えば二人称) であり話
し手にとってそれ以上でもそれ以下でもないため, 話し手がどちらを「近い」
と感じるかはひとえに移動行為者である第三者のことを話し手がどのように感
じるかにかかっている。



上述の例(26)-(30)が示すように, 話し手にとって聞き手領域よりも「遠い」
と感じられる第三者の移動行為者としては, 聞き手と親しい存在や不特定多数
の存在が挙げられる。一方, 聞き手領域よりも「近い」と感じられるのは話
手領域から出発した存在や, 話し手と親しい存在である。

例(26)-(27)は移動行為者が聞き手の両親や不特定の花火の見物客であるか
ら, これと比べて聞き手領域の方が視点を寄せやすい。同様に, 例(28)-(29)a,
bの移動行為者は自然現象の「ハリケーン」, 「台風」(人間ではない)である
から, 基本的には聞き手領域よりも優先的に視点を寄せられるはずがない。た
だし, 状況から考えて, 「ハリケーン」は話し手領域を出発したものだという
解釈がほとんど成り立たないのに対して, 「台風」はそのような可能性も十分
にあるため, そのことが例(28)-(29)a,bの「行く/来る」の使い分けの差異の
原因となっている。つまり, 「ハリケーン」や「台風」が単なる自然現象であ
る場合は話し手にとって(聞き手領域より)「近い」存在にはなり得ないが,
それが話し手領域を出発した存在ということになると, 話し手にとって「近い」
存在となる。

また, 例(30)については, 移動行為者が話し手の「母」であるから, 基本的
には聞き手領域よりも視点を寄せやすい。ただし, 3.2節ですでに述べたよう
に, 話し手の家族・親族であってもあくまで第三者であり, 常に聞き手領域よ
りも優先的に視点を寄せられるわけではない。たしかに, 話し手と「母」が同
居している場合などは, 「母」は話し手にとって「近い」存在になりやすい。
しかし, 同居していない, あるいは同居していても話し手が気付いた時には

「母」はすでに家を出ていたという場合などは、話し手の「母」であっても話し手にとって「近い」存在にはなりにくい。

4.2 「聞き手がその他領域へ」の移動

次に、「聞き手がその他領域へ」の移動の例を観察する。

(31) a 昨日山田君のところに {行った/*来た} そうですね。

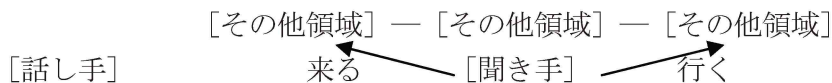
b 明日山田君のところに {行く/*来る} んですか。

(32) 国家とは何かを知りたければ国境に行って {/*来て} みることさ。

鉄条網で嚴重に区切られ、兵士たちがきびしい監視。地球上を細かく分断し、人間をその中に閉じ込めてしまうのが国家。

橋本勝『Peace 戦争と平和のアルファベット絵本』

移動動詞の選択が一律に「行く/*来る」となっていることから、一見、人称型視点 (E: 聞き手>その他領域) が関与しているようにも思えるのだが、実際はそうではない。この場合、人称が上位の方に視点を寄せる原則と行為者に視点を寄せる原則のどちらが適用されても移動行為者に視点を寄せる結果になる。そのために「来る」が選ばれる可能性が大幅に低くなることは確かだが、それでも、ここで関与しているのも文脈型視点であり、「行く/来る」の使い分けを決定する要素は相対的な共感度である。ただし、やはり聞き手は聞き手であるから、話し手が移動先と移動行為者のどちらを「近い」と感じるかは、ひとえに移動先であるその他領域について話し手がどのように感じるかにかかっている。



その他領域の範囲内で話し手が「近い」と感じやすい移動先として、話し手の心理的帰属先（話し手の故郷など。この用語は張芑蕾(2009)による）や話し手が移動行為者よりも通曉している場所などが考えられる。

(33) (中国での会話。話し手は日本人、現在は中国に住んでおり、来年帰国する予定はない。聞き手は中国人。)

a 来年日本に留学に {行きます/?来ます} か。

b 来年はぜひ日本に留学に {?行って/来て} ください。

筆者の語感では例(33)aは「行く」、bは「来る」がより自然に感じられるのだが、他にも話し手が「日本」を離れてからどのくらいの期間が経過しているか、いつか日本に帰るつもりがあるか否か、(聞き手が本当に日本に留学するとして) 留学先は話し手が生まれ育った地域であるか否かなど様々な要素が

「行く/来る」の使い分けを左右しそうである。これらの要素によって当該の移動先について話し手がどう感じるかが左右されるからである。

これと関連して、次に挙げるのは、筆者が中国・大連に一年間語学留学していた時（2005年）の友人の発話である。その友人は当時大学四年生で、日本の某大学でチベットの歴史・文化を専攻していた。筆者とその友人は夏休みを迎えるにあたってそれぞれの休暇中の計画について話していた。

(34) a 友人：私はやっぱりチベットに行こうと思うんだけど。

b 古賀：チベットかぁ。滅多に行く機会がないし、僕も興味あるな。

c 友人：古賀君もチベットに来る {/行く} の？

もう少し説明すると、その友人は旅行は一人でしたいという人で、筆者と一緒に行く気もなければ、「チベット」で筆者と会うつもりもなかった。そのため、余計にcでの「来る」の使用が注目に値する。ここで友人が「チベット」に視点を寄せたのは、自分は四年弱の間チベットの歴史・文化を専攻しており、聞き手である筆者よりもチベットに「近い」という意識からであると推測される。なお、言うまでもなく、この文脈において「行く」を選択することも十分に可能である⁶。

斯くの如く、聞き手と第三者が関係する移動の場合、どちらが移動先でどちらが移動行為者であっても、そこに関与するのは文脈型視点であることが明らかになった。

5. 移動動詞文と視点(3)——第三者同士の移動

第三者がその他領域に移動する場合、移動先も移動行為者も人称で言えば三人称であるから、「E：話し手>聞き手>第三者」という人称による優先順位が話し手の視点を制限することはない。したがって、第三者同士が関係する移動の場合、「行く/来る」の使い分けに関与するのは文脈型視点である。よって、ここでの関心事は、文脈型視点に関与する状況下で話し手が移動先と移動行為者のどちらに視点を寄せるかを決定づける要素は何かという点に限られる。

まず、前節（第4節）でも触れた二つの原則のうち、人称が上位の方に視点を寄せる原則はここでは無効である。したがって、行為者に視点を寄せる原則のみが適用されることになる。

6 cで「来る」が用いられるのは、移動先が未来における話し手位置であるからという要素も非常に大きい。ただし、ここで話し手は移動行為者を移動先（チベット）で迎え入れる心づもりは全くないので、その点で未来における話し手位置が準話し手位置に昇格する条件を完全には満たしていない。この文脈で「行く」の使用も可能であるのはそのためである。

- (35) 三十分以上かけて屋敷中をくまなく家捜ししたあと、弓子は、聡史郎が片付けをしている倉庫にやってきた。「いざというとき美鎖が行く {/*来る} ところに心あたりはありませんこと？」

桜坂洋『よくわかる現代魔法』

- (36) そんな疲れを癒してくれる、交通機関隣接のお風呂を大紹介！どこへ行っても {/*来ても} 大混雑のゴールデンウィーク。無理やり先を急ぐより、旅の途中のお風呂でひと休みするのもいいのでは。

『DIME』2005年5月19日号

ただし、話し手が移動先のことを「近い」と感じる、或いは移動行為者のことを「遠い」と感じる要素があれば、移動先に視点が寄せられる可能性が生じる。

- (37) 近い将来、日本にも地震による巨大津波がやって来る {/*行く} 恐れがある。そこで、台湾にある世界最大の造波装置を使って、実験を行った。

『週刊新潮』2005年3月31日号

- (38) つまりそれは、その時点で日本が世界三大海軍国に入っているということなのです。一八五三年に黒船が来た {/*行った} 段階では、一隻の蒸気船もなかった国が、それからわずか六〇年から七〇年で世界三大海軍国になっているのです。井沢元彦『日本史集中講義』

- (39) 現在、弁護士は供給不足状態にあり、着実に富裕階層への仲間入りを果たしつつある。日本へ出稼ぎに行く {/来る} どころか、日本から上海へと、司法事務所が続々と進出しているご時世だ。

田島英一『上海 大陸精神と海洋精神の融合炉』

- (40) 半分が北米、半分がヨーロッパといったところか。ヨーロッパは、オランダと英国が多い。コスタリカに来る {/行く} 観光客は、このほか、ドイツ人も多い。

山口由美『世にもマニアな世界旅行』

話し手が「近い」と感じる可能性がある場所は、やはり話し手の心理的帰属先や話し手が通曉している場所などである。ただし、移動先がそのような場所であっても、必ずしも「来る」の使用が強制されるわけではない。

例(37)-(39)の「日本」は話し手の心理的帰属先であり、例(40)の「コスタリカ」は話し手が通曉している場所であると考えられる。

ここでまず、これらの発話が「日本」、「コスタリカ」で行われたものであり、それが「行く/来る」の使い分けを左右している可能性も否定できないことに注意を払う必要がある（もしそうであれば、人称型視点が関与していることになる）。筆者の語感では、例(37)-(39)は日本以外の場所における発話であっても「来る」の使用が可能であるが、例(40)は発話の場所が「コスタリカ」でな

ければ「行く」が選ばれる可能性ははるかに高い。これは明らかに移動先の質の違いによる。つまり、話し手の心理的帰属先は場合によっては視点を寄せられるに値するほど「近い存在」になり得るが、話し手が通曉している場所という程度では行為者に視点を寄せる原則が優先される可能性が高いのである。

また、移動行為者が相対的に「近い」か「遠い」という点も考慮に入れるべきである。例(37)-(38)の移動行為者は自然現象の「巨大津波」や、話し手が直接に目にするのではない「黒船」であるから、話し手にとって相対的に「遠い」。一方の移動先は話し手の心理的帰属先であるから相対的に「近い」。よって、話し手が移動先に視点を寄せる必然性を十分に備えている。

例(39)の場合、話し手は移動行為者である「弁護士」について通曉していると思われるから、その分だけ「近い」存在である。そして一方の移動先もやはり（移動行為者とは別の意味で）「近い」。それで、「弁護士が近い」という事実がより重視されれば「行く」が、「日本が近い」という事実がより重視されれば「来る」が選ばれることになる。

また、「行く/来る」の使い分けを左右する別の要素として文脈による動機が考えられる。

(41)a 与太郎が御隠居のところに {行った/?来た}。

b 御隠居はとても疲れていた。そんな時に与太郎が御隠居のところに {/?行った/来た} のである。

例(41)aで、話し手が発話時、或いは「与太郎」の到着時に「御隠居のところ」に居たという可能性はないものとする。そうであれば、第三者同士の移動であるから、行為者に視点を寄せる原則から通常は「行く」が選ばれる。ただし、bのように文脈全体が「御隠居」の立場からの描写である場合、当該の移動の事態も移動先である「御隠居」に視点を寄せて描かれる可能性が高くなる。これが文脈による動機である。

(42) 主人公の探偵はロンドン警視庁のジョン・アプルビー。彼の独身のアパートへイギリスの首相が訪ねて来て {/?行って}、事件を依頼する。
江戸川乱歩『わが夢と真実』

(43) もっとも、これに対しては慶喜にも言い分はあった。五月十四日、島津久光以下が二条城にやって来た {/?行った} 際、慶喜は、諸藩の回答を待たずに幕府単独で兵庫開港の勅許を奏請した理由を述べた。
家近良樹『徳川慶喜』

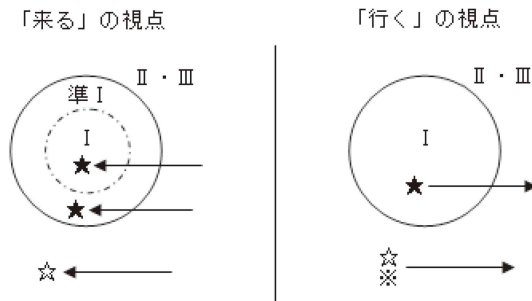
上述二例で「来る」が選ばれているのは、それぞれ「ジョン・アプルビー」、「慶喜」の立場からの描写が続いているため、当該の移動の事態についても「ジョン・アプルビー」、「慶喜」寄りの視点を採用するほうが自然だからであ

る。

以上、第三者同士の移動に関与するのは文脈型視点であり、文脈型視点では行為者に視点を寄せる原則から比較的「行く」が選ばれやすいことを示した。その上で、話し手が移動先に視点を寄せる動機となり得る要素についても幾つか検討した。

6. おわりに

本稿の考察を通して明らかになった移動動詞「行く/来る」の使い分けと視点の関係を図示すると、以下ようになる（図中の「★」は人称型視点、「☆」は文脈型視点、「※」は中立の視点をそれぞれ表す）。



まず、「来る」は求心的な移動を表すのに対して「行く」は非求心的な移動を表すという点で両者は対称的である（規定①）。

その上で、「視点」概念を一先ず人称型視点と文脈型視点の二つに分けて分析を行ったところ（規定②）、人称型視点に関与するのは話し手⇄他者の移動のみで、聞き手⇄第三者の移動や第三者⇄第三者の移動には文脈型視点に関与することが明らかになった。これはすなわち、移動動詞「行く/来る」の使い分けには「一人称 vs 二・三人称」（話し手 vs 非話し手）の対立の構図が働いていることを示すものである。

また、人称型視点との関連で移動先、また移動行為者としての話し手・準話し手として認められる存在の範囲についても考察し、また文脈型視点との関連で話し手の視点が人称による優先順位に規定されない場合の「近い存在」の決定のされ方についても考察した。

筆者としては、この研究が今後少なくとも以下の二つの方向に発展していくことを願いたい。

一つ目は、日本語の他の文法項目との関連という方向である。本稿では移動動詞文を主な調査対象としたが、言うまでもなく視点が関係する文法項目は他にも数多く存在する。本稿で準備した視点の枠組みは、移動動詞文の考察にと

どまることなく、他の文法項目にも応用されてこそはじめて価値を持つものである。たとえば、授与動詞「(て)やる/(て)くれる」の使い分けは、久野(1978)が「共感度」概念を用いて説明できる文法項目の代表として扱っている。また、移動動詞文と授与動詞文は「求心的な移動・授与 vs 非求心的な移動・授与」という点で並行しているという指摘もある⁷。したがって、授与動詞文に本稿の視点の枠組みを応用できる可能性は高い。具体的にどのように応用できるかは今後の重要な課題である。

二つ目は、他言語の移動動詞文（あるいはその他の文法項目）との対照研究という方向である。筆者としては今のところ英語の“go/come”や中国語の“去 qu/来 lai”との対照研究を想定している⁸。本稿の視点の枠組みは今のところあくまで日本語においてのみ有効なものである。他言語への応用を試みたときに、まずどの程度有効であるか、そして日本語の視点の枠組みとの異同を明らかにするためにどの程度寄与することができるのか。今後の研究が待たれるところである。

本稿で準備した視点の枠組みが日本語（や他言語）の視点について議論を深めていくための足掛かりになれば幸いである。

【参考文献】

- 井島正博（1992）「視点の表現機構」『成蹊大学文学部紀要』28
 大江三郎（1975）『日英語の比較研究——主観性をめぐって』南雲堂
 奥津敬一郎（1979）「日本語の授受動詞構文—英語・朝鮮語と比較して—」『人文学報』132 東京都立大学
 久野暉（1978）『談話の文法』大修館書店
 下地早智子（1997）「移動動詞に関わる『視点』の日中対照研究」『中国語学』244
 下地早智子（2004）「日中両語における文法事象としての視点の差異—移動動詞・受身の表現・テンス／アスペクトの場合—」『外国学研究』58 神戸市外国語大学外国語研究所
 城田俊（1996）「話場応接態（いわゆる『やり・もらい』）—『外』主語と『内』

7 大江（1975）、城田（1996）を参照のこと。

8 山口（2002, 2011）はすでに、日本語の移動動詞文には「一人称 vs 二・三人称」の対立の構図が働いているのに対し、英語の移動動詞文には「一・二人称 vs 三人称」の構図が働いていることを指摘している。この分析は本稿の視点の枠組みと非常に近いものである。また、中国語との対照研究としては下地（1997, 2004, 2007）、中澤（2002）、彭广陆（2008a）、彭広陸（2009）、張芑蕾（2009, 2011）などがそれぞれの観点から考察を行っている（中澤（2002）は日・英・中の対照研究である）。

主語—」『国語学』186

陣内正敬（1991）「『来る』の方言用法と待遇行動」『国語学』167

盛文忠（2009）「移動動詞に関する日中対照研究—『イク/クル』と“来/去”を中心に—」『日语动词及相关研究』张威・山冈政纪〔主编〕外语教学与研究出版社

張芄蕾（2009）「視点移行と移動動詞の選択に関する日中対照研究」『現代中国語研究』11

張芄蕾（2011）「認知言語学的アプローチによる日中移動動詞の対照研究—事態把握から見た『来る』と“来”—」『現代中国語研究』13

中澤恒子（2002）「『来る』と『行く』の到着するところ」『シリーズ言語科学4 対照言語学』生越直樹〔編〕東京大学出版会

彭広陸（2009）「日文中訳から見た日中両語の移動動詞—『来る/行く』と“来/去”を中心に—」『日语动词及相关研究』张威・山冈政纪〔主编〕外语教学与研究出版社

森田良行（1968）「『行く・来る』の用法」『国語学』75

森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房

森山新（2006）「視点についての認知言語学的考察」『科学研究費補助金研究基盤研究(C)課題番号17520253 認知言語学を生かした日本語教授法・教材開発研究～1年次報告書』

山口治彦（2002）「直指動詞と対話空間：英語，日本語，そして九州方言をもとに」『神戸外大論叢』53-3

山口治彦（2011）「第12章 英語との対照」『はじめて学ぶ日本語学—ことばの奥深さを知る15章—』益岡隆志〔編著〕ミネルヴァ書房

山田敏弘（1999）「富山方言における『行く』『来る』の用法について」『富山国際大学紀要』9

渡辺伸治（1999）「『視点』諸概念の分類とその本質」『大阪大学言語文化研究』25

彭広陸（2008a）〈从翻译看日汉移动动词「来る/行く」和“来/去”的差异—以译者观察事物的角度〉《日语学习与研究》2008年第4期

彭広陸（2008b）〈日语研究中的“视点”问题〉《认知语言学入门》池上嘉彦・潘钧〔主编〕外语教学与研究出版社

下地早智子（2007）〈语法现象里视点用法的日汉差异—直指性移动动词、被动表述以及时态/时制的情况—〉《日本现代汉语语法研究论文选》北京语言大学出版社

续三义（2007）〈日译汉时的视角和文脉—「来る」「行く」と“来”“去”—〉

《日语研究》第5辑 商务印书馆